

令和 2 年 9 月 14 日現在

機関番号：95401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K07927

研究課題名（和文）戦後の引き揚げ者による農村開拓と大規模化農政における海外移民との関係に関する研究

研究課題名（英文）A Study of the Relation between the Wasted Land Settlers and the Government Policy in the Agricultural Section

研究代表者

中田 英樹（NAKATA, Hideki）

特定非営利活動法人社会理論・動態研究所・研究部・研究員

研究者番号：70551935

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,700,000円

研究成果の概要（和文）：終戦直後、引揚者を含め膨大な過剰人口を抱えた日本では、国有林や御料地といった未開墾地を広く戦後開拓農村として指定し、そうした過剰人口を入植させた。だが本研究が事例とした岩手県東北内陸部などは、高度成長期に向かう過程にて、大規模酪農地帯へと国家再統合させる地となり、そこで多くのこうした不毛の地への入植者が、成長著しい国内都市部、そしてラテンアメリカへと移住させられた。本研究では、岩手県一戸郡の奥中山戦後開拓地を例に取り、当地の戦後史を、当地から南米パラグアイの「岩手村」へと移住した人をも含めて再構成し直し、地域研究の新たな地平を開いた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

明治期にて日本国が近代国民国家建設への道を歩みはじめて以降、特に戦後における南米への移民送達は、時には「棄民」などと日本現代史の「枠外」に追いやられてきた。

だがそうした移民者たちの生活史をミクロに調査し、それを彼ら彼女らを取り巻く大きな時代の動向につなげて考えた際、例えば本研究の取り上げるパラグアイへの移民が、現代日本が不可欠な「安心・安全」の大豆を供給し、現在日本を支えていることがわかった。

戦後開拓農村研究は十二分に蓄積されてきたが、それらは対象を行政的な境界で対象地域を切り取って閉じたものとして措定しているが、その地域に流入、流出してきた人の視点で再構成することの意義を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：After the WWII, the most serious problem Japan had was over population, especially due to returned population who had been living in the Japan imperialism territory. In order to this problem, these people has been sent to the opened wasteland in the domestic territory where the survive conditions were fatal, for example the climate conditions, acid soil, steep ground, etc.

To the high-speed growth era in Japan, however, these wasted lands (especially northern part of Japan, so cold) had to be converted as the useful one for the post-WWII Japanese government, such as large scale dairy region. This is why such a large population have been imposed to emigrant again to Latin-America in the period from after WWII to the high-speed growth era. In this case study, it was been cleared that to describe a monograph of marginal rural area should pay attention to these emigrants people.

研究分野：農村社会学・農業経済論・ラテンアメリカ地域研究・移民研究

キーワード：海外移住政策（日本における）近代化 戦後開拓（稲作不毛地帯の）大規模酪農家計画 グローバリゼーション 自由貿易協定

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究初年度となった 2015 年に至り、中田は北東北の稲作など不可能で貧乏な孤立した山村において、戦後においても農村の女性が家に閉じこもり、厳しい家父長制や地主小作制度のもとで被抑圧者であることに関して研究していた。岩手県県立図書館で文献資料調査をしているなか、江刺家(1965)に出会った。それは岩手の中でも最も貧しい地とも言えよう一戸郡奥中山戦後開拓地を事例対象とした論文であり、そこで描かれた奥中山の戦後開拓史は、決して山奥で孤立した集落ではおらず、生活条件の厳しさから相次いで離農・離村者を多く生み出した。戦後開放された 4000ha という広大さから県下でも最大の開拓地となった。奥中山史は決して閉じてはおらず、この地を去った者たちは、南米パラグアイの「岩手村」の主要メンバーにもなっている。

この点を受け、中田は対象を行政的地理的境界線で切り取られたものとしてではなく、奥中山たる地に入り・離村した人々たちの視点から再構成することに学的意義があると考え、本計画の立案に至った次第である。

* 江刺家磐男、1965 年「奥中山開拓者の集団農業移住について」『岩手県奥中山開拓者の集団南米農業移住：農業協同組合における推進事例』、農業拓殖協会、23-83 頁

2. 研究の目的

本研究では、東北北部の山奥に潜む戦後開拓農村に焦点を当て、入植や離脱した人々の個人史の視点から、これら諸村落が戦後農政の大規模化・近代化路線のもとで、どのように国家へと再統合されてきたのかを考察することを目的とした。

東北山間部の戦後開拓農村へ満蒙からの引き揚げ者が入植する過程および、その後、同村での開拓農業に頓坐し、南米へと移住していった人々の過程を、聞き取りや資料から辿ることで、日本の戦後開拓農村に関する研究と、戦後の海外への日系移住民に関する研究を、分断せずに横断的に議論する農村研究の意義を浮き彫りにした。

そして、これら諸村落への入植した人びとや、戦後海外農業移民施策によって南米へと移住・帰還した人びとの個人史が、日本の戦後史から隔絶された無用の歴史ではなかったことを実証するとともに、戦後の日本経済史において、周縁社会に押しつけてきた諸問題を、新たに捉え直すことを試みた。

3. 研究の方法

2016 年度では、岩手県奥中山の戦後開拓史の特徴を取りまとめるべく、主に岩手県立図書館にて、広大な岩手県という地域の歴史的全体像を対象に、おもに戦後開拓期にとりわけ特化して文献調査した。

2017 年度は、パラグアイの日本人村「岩手村」あるいはパラグアイの首都アスンシオンにおける日本人移住者のコミュニティなどを訪れ、渡パラグアイした岩手からの日系人が、どのような社会を作り上げているのかについて現地調査した。加えて岩手県(岩手県立図書館など)での資料文献調査や、奥中山での聞き取り調査を展開した。

2018 年度は前年度のパラグアイ調査での聞き取り内容を奥中山の人たちに話し、微妙な誤差や誤認識がないか、「ある」場合にはパラグアイで聞き取り調査協力者と連絡を取り、そのズレの原因やより正確な記述としてまとめることとなった。また、この時期にて都内の某出版社から、これら諸研究をまとめた単著のオファーを頂いた。加えて、岩手県の行政が依頼しても何度も断られた、奥中山の近現代史を生き抜いてきた A 氏が聞き取りに承諾いただくに至り、またその際に橋渡しとなっていたいただいた初代開拓団長の義理の娘の B 氏から、極めて重要な情報をいただき、本研究が成果として「面白い」となる大きな軸が固まった。

最終年度（2019 年度）では、本研究が事例として取り上げている、岩手県二戸郡一戸町奥中山にて、最終の研究発表内容に関する承諾を頂きに訪れた。またここまでの成果をコンパクトに纏めたものとして、中田英樹、2019 年 12 月「国家資本主義の周辺史に関する移住民の生活氏からの再考」、Vol.26、『部落解放研究』広島部落解放研究所、93-118 頁、を執筆し公表した。

4 . 研究成果

奥中山戦後開拓地に現在暮らす住民（とりわけ開拓当初を知る高齢者の方々）やパラグアイの「岩手村」の開拓第一世代及び二世の方々への聞き取り調査と、『奥中山開拓 40 周年記念誌』や『ピラポ開拓 30 周年記念誌』などといった文献資料調査を 2 つの大きな作業の軸として研究を進めた結果、例えば次のようなことが明らかになった。

現在、これら地域で住民たちが奥中山戦後開拓地と呼んでいる地域社会は、決して戦後に開拓地として開放されたと同時にできたものではなく、戦後、日本政府がこれら地域を大規模酪農地帯として国家再統合しようと農業政策を施行する過程がもたらした歴史的産物として、「隣人」たちが密な人間関係のもとで繋がれた地域社会となった。そしてそれを可能としたのは、離農・離村して都市部に出稼ぎに行った者たちや、パラグアイへと移住した者たちであった。他には、パラグアイへと移住した者たちとは、奥中山を離れたと同時に「離村者」として戦後の奥中山史から消え去ってはならず、奥中山で営んでいた大豆栽培をパラグアイで大規模化し、現在の日本国内では自給できない大豆を日本へと輸出する、世界トップクラスの大豆生産国パラグアイを成立させた。

このようなことは、戦後奥中山開拓地の歴史を、地理的境界線で切り取って閉じたものとしてではなく、この地に移入したり、離れていった者たちの視点から奥中山地域史を再構築することで実現可能となるという、有意義な地域研究の地平が浮かび上がることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 中田英樹	4. 巻 26
2. 論文標題 国家資本主義の周辺史に関する移住民の生活史からの再考	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 部落解放研究	6. 最初と最後の頁 11 - 21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中田英樹	4. 巻 45
2. 論文標題 移民の開拓する毎日は「進出」か「侵略」か 在伯日系移民 が「二分制限法」実施にみた「恐日病」の世界と日本帝国の近代	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 226-235
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中田英樹
2. 発表標題 伝統的な「古き良き農村」に根ざす日系ブラジル人学校
3. 学会等名 日本村落研究学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----